

〔論文〕

神話素システムと2コンパートメント準平衡理論 —旧石器時代から新石器時代への 精神の飛躍に関するシステム論序説

矢 後 長 純

まえがき

シカゴ大学のWendy Doniger教授は1995年、コレージュ・ド・フランスのClaude Lévi-Strauss教授が1977年12月にカナダのCBC放送で行った講演集“*Myth and Meaning*”¹⁾という60ページ足らずの小著に序文を寄稿した。「昔々ある時、カリフォルニアのバークレイで、とあるレストランに入ったLévi-Straussは、…」と、Doniger教授は、南北アメリカ大陸先住民の神話の中に神話素 (mythemes)²⁾ による二項対立を発見したLévi-Strauss教授の功績を、ジョークをまじえて称えた。

神話素は、名詞のこともありテキストのこともある。二つの神話素が二項対立により一つのシステム、神話素システムを形成し、それがさらに重層する二項対立を経て、特異な物語を析出する、それが神話である²⁻⁴⁾。それらの神話を継承維持してきた先住民は、自然や文化を神話素システムの多重構造として理解し、日々の生活に必要なスキーマを創生する。

旧石器時代から新石器時代への精神の飛躍は、二項対立による神話素システムの生成という表現型を取っていた。しかし、(1) その基礎形式が現生人類のどのような脳機能の進化に由来したのか、(2) その進化は脳のどこでおこったのかについては不明である。

本稿では、第一に神話素システムと2コンパートメント準平衡理論に基づくクワッソン^{5, 6)}との関係を検討し、二つの神話素システムのカップリングが複合クワッソン性システムを形成することを示す。題目の精神の飛躍は無意識の表象を神話素システムにまとめる機能にあったとする。

また第二の問題については、Lévi-Strauss教授のいう野生の思考 (*La pensée sauvage*)⁷⁾ を感覚と強く結合した右脳の機能と推察し、それが左脳におけるよりも優越していたと結論する。進化における右脳の優越については、先にβエンドルフィンとの関係を強調する多摩美術大学中沢新一教授⁸⁾の論考がある。

“*Myth and Meaning*”をめぐる本稿は文化を学ぶ極東の一老学徒から、2009年10月30日、100歳で永眠したコレージュ・ド・フランスのLévi-Strauss教授へのささやかな追悼文としたい。

第1章

神話素システムと複合クワッソン性システムにおける二項対立

1. 神話素システム

新石器時代とされた南北アメリカ大陸の無文字社会からは、17世紀以来、膨大な神話群が採集されていた。Lévi-Strauss教授はそれらを研究し、先住民が混沌と多様性に満ちた世界に対称性の無限の連鎖を発見していたことを示した¹⁻⁴⁾。それらの神話は、人間とは何か、世界とは何か、動物や植物はなぜ存在するか、火や水はどのようにして人間のものになったか、なぜ人間は一緒に生活している動物たちと話ができないのか、などの疑問に対する答えであった。

神話素は物体を構成する元素という概念に部分的には対応しているが、その定義はかなり柔軟である。Lévi-Strauss教授自身、神話は西洋音楽の楽譜に近いと見ていた¹⁾。しかも神話素は、環境との相互作用により変動する。最新の定義は、以下に引用する福島亮大氏⁹⁾のものであろう。「神話素というのは、文化的に広く共有されつつも、しかしひとごとに異なった内容が封入されていく記号のことである。同じ神話素でも、たとえばAというコミュニティ（神話圏）にある場合と、Bというコミュニティにある場合では、それぞれ他の神話素との関係が変わるので、意味もまた微妙に変わってくる・・・」。

極端な場合には人や動物がまったく別のものに入れ替わってしまう。神話は構造固定的なものではなく、一種の現象として複雑を極める。Lévi-Strauss教授は、このような変化

にも法則性を発見したが、実は教授の著書そのものも難解である¹⁰⁾。神話素も神話も、あたかも実在の世界を写しているかのようだが、実は表象の世界に浮遊していて、実在とは対応関係がないため分析科学の対象にはなりにくい。このことは神話素が無意識の表象から言語へ翻訳されたものであることを示している。このような不安定な対象へのアプローチは、システム論からならば可能であろう。

神話素の二項対立とは、対称性の関係を持たせた二つの神話素のことである。対称性には、太陽と月のように現代でも理解しやすいものもある。理解しにくいのは、神話素がテキストである場合の二項対立である。たとえば、「人は肉を焼いて食べる」というテキストは神話素として、「ジャガーは肉を生で食べる」というもう一つの神話素と二項対立の関係にある。この二つのテキストが、それぞれ、「人は火を知らなかった」と「ジャガーは火の支配者だった」と神話素システムを形成し、結局、人間はジャガーから火を盗んできた、という神話の創作に至る。これが有名なジェ神話¹¹⁾である。この二項対立は現代人にとっては理解しにくいが繰り返し熟読すると、いつしかブラジルのジャングルに住む先住民の作品に共感を覚えるようになる。現代のわれわれにも、かつて彼らと同じ生活を送った記憶がかすかに残っているのかも知れない。ここで重要なことは、表象に対して二項対立を適用するという先住民の智慧である。これは旧石器時代にはなかったものであろう。

Lévi-Strauss教授¹¹⁾は、次のように述べた。「神話のテキスト全体は音楽を、そのハーモ

ニーとリズムのみならず、秘かな意味とともに保持している。その秘かな意味にありのままの状態に触れる衝撃が引き起こす力強さと尊厳を、私は残せなかったかも知れない。それはイメージと記号の森の奥に潜み、魔力に満ち、感動させる。理解できないからである」。

現代文学でも時に同様の魔力に遭遇する。カフカ『城』を評して専修大学の寺尾格教授¹²⁾は、霧と夜闇、夜と雪、黒と白などの二項対立が立て続けに生じ、見えない城を見えないままに見る、見える現実から見えない世界の凝縮を見せる異質な文学作品とした。『城』には、プラハ旧市街のユダヤ人街の錯綜した裏道を辿るような方向喪失感が満ちているが、近代の言語感覚とは全く異なった世界、見えない歴史の層へ読者を誘うものがあると述べた。『城』は、一種の神話なのであろう。

神話素システムの二項対立は、媒介物によって緩和される。その媒介物が、新たに他の神話素の作成を誘発し二項対立を再生産する。媒介物は表象の中に創造されるが、無限に続く連鎖は部族社会にあってある種の合理性を備えていなければならない。たとえば、動物は環境の中で日常、接することの出来るものでなければならない。なかでもジャガーや鷲は、直観的に高い地位に置かれた。こうしてブラジルの先住民は人生、世界、自然理解の鍵を取得したのであった。

火の神話は、人間がなぜ水を知っているかななどの疑問も、神話素システムに一定の変換を与えて解決する。こうして神話素システムは、無文字社会の日々の生活を支え、かつ世界理解のための必須のシステムとなり、ひいては彼らのもっとも重要な公平・無私無欲という概念を支えるものにもなった¹⁾。

恐ろしいジャガーも先住民と共に森に住むのであるから敬意をもって接しなければならない。野ブタも鮭も南風もそうである。こうして神話をめぐって構成された彼らの生活信条の力強さは、ブラジル政府からのあらゆる援助を拒否するほどであった。

神話素をはじめとして無文字社会の神話に現れる一つ一つのイベントには意味がない。神話は全体として意味をもつのであって、それはちょうど現代のわれわれがクラシックのオーケストラ演奏を聴くのと等価¹⁾である。また神話の構成には、語りまた聞くことへの喜びまでもが用意されていたことは明らかである。そうでなければ、口承ということはおこらなかつたであろう。

さらに自然への尊敬と愛着は、無意識のうちに自然の保護とその適切な制御手段を産んだ。文明からの支援を拒否する思考と態度、自らの文化を頑なに守る姿勢は、アマゾンを守り地球を守っていたのである。これらすべての機構は明瞭ではないにせよ、彼らの神話群に潜んでいるのは確かである。いかえれば、彼らは現代でもまだ十分には解き難い情報理論の仕組みを神話素に、またその二項対立に、さらに出来上がった神話に忍ばせたのである。

高度に哲学的な思想へと発展した彼らの公平・無私無欲の概念は、完璧な自然保護と生物多様性を保証するものとなった。しかし世界の多くの場所では新石器時代の成熟とともに神話が崩壊に向かった。ギリシャやペルシャでは、公平・無私無欲という概念はいち早く放棄された。文明に対して強固なアンチテーゼであった神話にも、どこかに脆弱な部分があったのであろう。そして現生人類が神

話を破棄した時、富の蓄積を重視する精神構造が発生したことはクリソスとソロンの対話¹³⁾で明らかであり、この新しい精神構造が古くから環境問題の原因にもなったのである。ただし、ここで現代ギリシャの名誉のために付言すると、異国人に対するホスピタリティを重んじるフィロクセニアだけは現代に至るまで数千年間、生き残っている¹⁴⁾。

旧石器時代から新石器時代に移行するにあたって現生人類におこった精神の飛躍をレディング大学のStephen Mithen教授¹⁵⁾は、認知流動性 (cognitive fluidity) と命名した。神話素システムは認知流動性と表裏の関係にあり、その後の科学・技術、文学・芸術の革新をはるかに凌駕するとさえいわれる¹⁶⁾。

2. クワッソンと複合クワッソン性システム

1997年⁵⁾と1999年⁶⁾に、筆者らは複合クワッソン性システムと名づけた単純なシステムが、地球上における生命の発生以来、現生人類に至るまで進化の全局面を貫徹していることを示した。このシステムは、2コンパートメント準平衡理論^{17, 18)}を原理とする2種類のクワッソン (quassone) のカップリングによって構成された生体システムである。

クワッソンとは、ある瞬間における状態がAまたはBの相異なる2つに分配されるシステムである。状態は離散的であり、いわば量子化されていて時間の推移とともに互いに他に突然のように遷移するが、状態Aと状態Bは準平衡にあり、長期的には状態Bの出現頻度が高くなる。クワッソンは環境中にあるので、その構造も特性もともに淘汰圧に曝され

ている (図1)。クワッソンの遷移が突発的におこる理由はまだ理論化されていないが、環境との相互作用が主因であろう。

クワッソンが存在する空間は表象空間であり、図1はそこからの平面への写像である。また、クワッソンには明確な“始まり”もなく“終わり”も無いように思われる。これは、クワッソンが後述のノワーズの世界にあることを意味するのであろう。この理論を用いての計算を3次元空間におけるシステムの運動としておこなうのは、思考経済である。

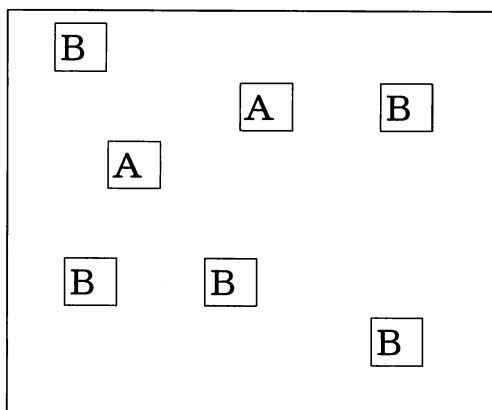


図1 この図では、クワッソンは表象空間において、ある時刻に一種類のクワッソンが確率2/7でA状態に、確率5/7でB状態に分配されている。

次に第一のクワッソンの近傍に、状態CまたはDに分配されている第二のクワッソンが存在すると考える。当初、第一および第二クワッソンは相互に独立であるが、第二クワッソンの表層に何らかの突然変異が発生し、第一クワッソンの状態Bと第二クワッソンの状態Cとがカップリングすると考える (図2)。DNAがRNAとカップリングする分子生物学概念のメタファーである。

第二クワッソンでは状態Cから状態Dへの遷移が加速または減速され、状態Dの実現確率が急速に変化する。このように、二つのクワッソンがカップリングしたシステムを複合クワッソン性システム (Compound quassonian system) という。状態CからDへの遷移が減速すれば、このシステムはやがて閉塞状態に陥り、長期的には環境の変化に適応できなくなって絶滅へ向かうであろう。

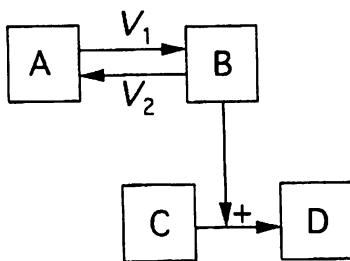


図2 第一クワッソン (A状態とB状態に分配され、準平衡にある) のB状態と第二のクワッソン (C状態とD状態に分配され、準平衡にある) のC状態が反応するように突然変異すると第二クワッソンのD状態への遷移確率が高まる。+は促進を表す。二つのクワッソンは、このカップリングにより緊密な関係となり、複合クワッソン性システムを構成する。状態間の移行を速度定数 V_1 および V_2 によって表現し連続関数を想定したが、 V_1 および V_2 は状態間の遷移確率と考えた方が考えやすい。

したがってシステムの発展を考える立場からは、遷移が加速される場合だけを考えればよい。もし、ここに第三のクワッソンがあって、先に形成されていた複合クワッソン性システムと相互作用をするようになれば、無限

のシステム発展の端緒が開かれることとなる。これが進化である。

ここに複合クワッソン性システムと神話素システムの重層構造との類似性/同一性が見て取れる。2種類のクワッソンがカップリングするとき、近距離の場合には酵素-基質反応や細胞膜表面におけるアゴニスト、アンタゴニストと受容体との相互作用を思い起こさせるが、ホルモン作用のような遠隔作用も考えられる。最近、ヒト脳において右脳から左脳への遠距離シンクロニゼーション現象が発見された¹⁹⁾。また複雑性で論じられる有名な例として、ブラジルの蝶がおこすテキサスの竜巻すなわちローレンツの“バタフライ効果”がある²⁰⁾。

第一クワッソンと第二クワッソンの位置について近傍という意味は物理的距離を指すばかりではなく、両クワッソンの情報が届く距離でもある。Lévi-Strauss教授はブラジルから南北アメリカ太平洋沿岸地域の部族居住地間の距離が神話の変換に重要な関わりがあったと述べているが、これも近傍という意味を情報伝達可能距離と取ったものといえる。

神話素システムとクワッソンに共通する重要な特徴として、前者では“もの”や動物、テキストの量子化、後者では状態の量子化が、それぞれ前提されている。神話論の世界で最近、量子力学の用語が使われるようになったのはメタファーとして便利だからである。テキストや状態の変動率は微分方程式で計算することができるので量子力学を必要としないが、ここで量子化という意味は神話素間あるいはクワッソンの状態間に中間のものは存在しないという意味である。ジャガーがレア、メディアムまたはウエルダンの肉を食べると

いう焼き方を区別した神話素はないようである。生のもの (the raw) か、火を通したものの (the cooked) のいずれかしかない。火を通したものはウエルダンに相当したらしいことは、ジェ神話のM10東部ティンピラの火の起源にうかがわれる⁷⁾。

そこではジャガーと一緒に暮らしている少年が肉を食べる時にパリパリと音をたてるのを、妊娠していたジャガーの妻が嫌ったという記述がある。音はウエルダンのベーコンを食べるときに出る音に近いものだろう。このことには肉を保存食にしたという智慧が見られるが、神話素の肉としては生肉から焼肉への連続性がきっぱりと断ち切られている。これにより情報を縮退させたのである。このことは、無文字社会における思考伝達の基本として、ひいては社会そのものの維持方法としてとくに重要だったと推測される。

第2章

神話素システムあるいはクワッソンの発生および変換機構

1. 神話素システムの発生

複合クワッソン性システムが適用された例⁵⁾には、溶原性バクテリア集団とそのファージの増殖、ネズミ肝ミトコンドリアの寿命、マウス乳がん細胞の増殖と崩壊、飼育環境下のドブネズミおよび野生ハタネズミの生命曲線の比較、18世紀ヨーロッパ都市住民の生命表、日本人の成長に伴う体重の増加、陸上哺乳類の地上最大体重の予測と実証、現生人類の生命表などがある。さらに、複合クワッソン性システムは西田哲学の純粹経験の世界にも浸透していることを見出し、「高い塀の

上から飛び降りようとしている猫は何を考えているか」という問題では、単一純粹経験が複合クワッソン性システムとして成長、成熟することを示した²¹⁾。また、複合クワッソン性システムは音楽、美術、詩の制作、鑑賞においても作動していることも示した²²⁾。こうして、ウイルスの増殖からスタートしたシステム論としての複合クワッソン性システムの射程は、生物進化、精神の進化にまで及んでいることを明らかにしてきた。

これまでの経緯では、クワッソンは対象の複雑さにもかかわらず、大局的なシステムとして扱った。システムを外側から見る立場を取る限り、クワッソン概念に基づいての現象のシミュレーションは容易である。たとえば、生命表の計算なども年齢別死亡率がわかれば基本的には解決されるのである。しかし文字もなく、ジャングルという大自然の中にいわば抛り出されたブラジル先住民は、神話素システムなり、クワッソンをどのように見出したのだろうか。これはシステムの内側から自己のシステムを観察する内部観測問題であり、至難の業と思われる。

ブラジル先住民にとって、自然は神話素の重責状態だった。そこからは、いくらでも神話素を拾い出せるし、二項対立を組み合わせる原理さえ知れば、神話素システムの構築は可能である。自然がそのような認知的な構造をもっていることに気づくまでの人類の時間、旧石器時代が長かったのである。

次の問題は神話素システムあるいはクワッソンの状態の変更にはどのような機構が必要だったか、ということである。どうすれば、火の起源神話から水の起源神話へ移行できるのか。これは神話素がきわめて多数の要素か

ら成り立っていることを示す。そのうちのたった一つの要素の変換でも、表現型の無限の変化が生まれる可能性がある。「人間は火を知らなかった」というステートメントは、単純そうदैて決して単純ではないことに先住民は気づいていたのであろう。このステートメントだけでも、無数の表象をもつことが出来る。それらの表象は、あらゆるイメージに接続することが出来る。このことは新石器時代、すでに記憶装置としての海馬の機能が開花していたことを示唆する。

こうして神話素が含む無限の表象は、神話素システムの無限の変化をひきおこす。このことは、神話素システムやクワッソンの離散的な性質に由来すると思われる。原子量の大きな元素の最外殻電子に、無数のエネルギー準位が想定されているようなものである。クワッソンでは、表層構造の無数の突然変異が可能であることに相当する。

2. 現生人類に内在する二項対立

先住民にとって、神話と現実とは相対立し、一つのクワッソンをなすと感じられたであろう。神話の世界と現実の世界が二項対立の関係にありながら、西田哲学の一即多、多即一を感じていたからこそ自然の中に埋没しての生活が可能だったに違いない。

しかし、同じく新石器時代にあったとはいえ、古代ギリシャ人はブラジル先住民にくらべるとはるかに壮大な神話の世界を築き上げた。しかし彼らは神話の世界に浸りながら、一方では精密な市場管理や農業歴管理も行っていた²³⁾。このことは、右脳と左脳の複合クワッソン性システムを統合する機能の存在が必須であったことを示唆する。上で触れた右

脳から左脳へのシンクロニゼーションはその端緒であろう¹⁹⁾。古代ギリシャ人が神話の世界と現実の世界は二項対立をなすと考えていたことは確かだが、その二項対立は解離しつつあった。彼らは自然に埋没することはなく、文化へ向かったのである。

もう一つの問題は、神話素システムが長期にわたって維持された部族社会は農耕をしながらも狩猟採集生活を継続し、一方で現生人類の多くの部族が各地で歴史に突入した理由である。初期新石器時代に入った現生人類の多くの部族が農耕を開始し、まもなく成熟した新石器時代を経て青銅器時代、鉄器時代に移行し、文化は各地で爆発的な展開を見せ始めた。この間の時間的経過は極めて迅速で、定かな時代区分はほとんど不可能である。

ニューギニア、フィリピン、オーストラリアおよび南北アメリカに住む先住民の一部は、歴史のはじまりを頑なに拒否しつづけてきた。すなわち、現生人類であっても初期新石器時代への移行は果たしながら、その成熟を拒むグループが今日でも存在するという事実は、何に由来するのか。一方で新石器時代への成熟を積極的に取り入れたユーラシア大陸の現生人類の精神的背景は何だったのか。神話素システムを考察していてすぐに気づくこの問題は、あまりにも大きく、問題の深さすら定かには分からない。

先住民のがわに科学的精神の発達が見られなかったことは確かであるが、Lévi-Strauss教授の膨大な著作が難解なのは、われわれのがわに神話的思考の減退ないし消失があったからとも思われる。浜辺に打ち寄せる波のように、始まりもなく終わりもなく果てしない変化を示す先住民の神話群が難解なのは、わ

れわれが科学教育を受け、その深刻な影響下に生活しているからであろう。Lévi-Strauss教授はいう、「諸神話の研究は方法論上の問題を提起する。すなわち、困難な問題の解を求めるために必要に応じて部分に分解するというデカルトの方法が通用しないということである。」神話は直観的観察力に基づく神話的思考によってしか理解できないとの主張である。

ただし、われわれにも直観的観察力がまったくないわけではない。今でもそれと気づかれない形でわれわれの文化に浸透している。たとえば、スーパー・マーケットでの買い物では、レジでの支払いは正確な科学的思考と技術に支えられているが、レタ一つを選ぶ場合にはいくつかを順に手にとって眺め、これでよしとするのを選ぶ。ここに働いているのは、新石器時代以来の直観的観察力であり、今でもアマゾンの熱帯雨林に住む先住民が使っている観察方法である。

彼らの観察能力に関しLévi-Strauss教授は、衣食住を森の動植物に依存していた日々の生活において専門の生物分類学者も及ばないと思われるほど、豊かな博物的知識を持っていたことを明らかにした⁷⁾。観察能力と急激に増大した記憶容量、またその記憶との照合能力が新石器時代初期にはすでに始まっていたことを意味する。このことは先住民の精神世界の豊かさを示すばかりではなく、東京大学の三中信宏教授²⁴⁾が指摘するように現生人類には万物を「種」(しゅ)に分ける生得的な分類思考がある。それが新石器時代に開花したことを意味する。

人類が火を獲得したのは50万年前に遡るとされているが、新石器時代初期の土器製作

と料理方法の発明に至るまでは、旧石器時代の人々が火を駆使していたとは思われない。陶土を用いて土器を製作する方法に気づいた新石器時代人たちが銅の精錬と青銅器の発明に達するのは、もはや時間の問題だったとLévi-Strauss教授は指摘した。さらに先住民の論理形成について次のように明確に述べた¹¹⁾。「生のものと火にかけたもの、新鮮なものと腐敗したもの、湿ったものと焼いたもの等々の経験的なカテゴリーは、民俗誌的な観察と個々の事例にある特定の文化の立場をとれば精確に定義することができる。また、これらの経験的なカテゴリーは、抽象的な観念を精緻に組み立てるツールとなり、さらにもろもろの観念を結合して諸命題を作り上げるのに用いられる」。

この言明に対して渡辺公三教授は、「感覚的質の対比によって野生の思考を目覚めさせ、駆動させ神話を生み出し、人間の生存のあり方への謎への答えをつむぎだして行く」と解説した³⁾。神話の創作には、野生の思考が目覚めなければならない。Lévi-Strauss自身も二項対立を一步一步展開し、個人と社会の論理が形成された様子をなぞっていった⁴⁾。そして、通常、まえがきとされる部分に『序曲』という名称をLévi-Strauss教授が与えた¹¹⁾のは、こうした思考が音楽的なものであることを強調するためだった。Lévi-Strauss教授は、言語の発生・獲得と音・音楽の発生がほぼ同時であったとする重要な生物学的な指摘もした。

このような議論を迎れば、現生人類のうちで歴史を持ち始めたがわに絶えず大戦争がおり、歴史を拒否してきたがわでは驚くべき高さの周産期死亡と低水準の生活を続けてい

るという、現生人類に内在する二項対立の深刻さだけは理解される。

3. 私語とは何か

Lévi-Strauss教授が直接体験したと述べているが、ほとんど暗闇の藁葺き小屋の中で、誰かが神話を語っている時、聞き手は極めてスカトロジックな話をしていることが多かったというエピソードがある。私語は、禁止されていなかった。スカトロジックな話題と笑いが神話という主メロディーに対するバックグラウンドを形成し、さながら歌手に対するオーケストラのようなものではなかったかと想像される。なぜ神話群が次から次へと変換を受けていったかということへの解答は、そこにもありそうである。

ある神話はその神話で完結し、次を期待できないという沈黙の世界に陥るのを防ぐ手だてでもあり、またバッハ、モーツァルトやロマン派の作曲家たちが次から次へと交響曲を始め、あらゆる音楽を生きている限り作曲したと相通じる現象であろう。

私語は、複合クワッソン性システムを途切れなく発生させ、成長させ、成熟させるための方途になっていたものと思われ、一種の進化論的な知性であった。フェゴ島人が岩陰に寄り添って際限もなく、他愛もない話をしてきた(第3章参照)のも私語の起源であろう。

そして大学や高校での講義中の私語の制御が困難なのは、私語そのものが現生人類初期の機能の遺伝的残滓だからであろう。それでいて一方では、これが制御可能であることは、Lévi-Strauss教授がコレージュ・ド・フランスでの講義中にいかにスカトロジックな話題を提供しても、聴講中のパリの教養人たちは

まったく笑わなかったことに示されている。

すなわち、複合クワッソン性システムの発展、Lévi-Strauss教授のいう変換群の生成を促す脳内環境は、複合クワッソン性システムと同時に発生するざわめき²⁵⁾ すなわちパリ第一大学のMichel Serres教授のノワーズに基づくものと考えられる。そして野生の思考の後に発生した後代の思考では、逆に私語は禁止されたが、それは宗教や国家権力の発生によるものだった。

4. 理想と現実

南米の先住民は、動物をトリックスターとして、いろいろな場面に感覚的にあてがってきた。それらには適宜、対立概念が与えられ象徴的な意味が付与されていたが、彼らに理想という概念があったかどうかは定かではない。Lévi-Strauss教授によれば彼らは感覚的に思考していた、いいかえれば右脳前頭葉のみを用いていた。このことは事物の間に明確な理念的対称性を構築するためには、左脳前頭葉の活動すなわち理性が必要であることをも物語っている。上部旧石器時代から初期新石器時代への移行には感覚を研ぎ澄ますこと、続いて歴史への移行には感覚から理性優位への変換が必要だったということである。

いったん、事物の間に理性に基づく対称性の認識ができるようになれば、神話素と同様、いろいろな対称性が発見される。左脳による対称性の発見は、現生人類の哲学の発祥を促した。イロドトス『歴史』によれば、富裕と貧困、幸福と不幸、などソロンとクリストとの問答でもかなり先進的な討論がされた。

対立概念についてカントは、論理的対立、実在的対立および弁証論的対立の三つを区別

した²⁶⁾。対立は矛盾である。対立する二者は、それぞれ単独では単なる規定であり、数学的な表現を借りればそれぞれは絶対値であるが、二つを比較することによって正負または大小がきまる。そのためには、二つを関係付ける第三の観点が必要であるとしているのは、第三の複合クワッソン性システムに該当する。

複合クワッソン性システムで一つの決断に到達しても、その決断を評価する基準がなければならぬ。それがもう一つの複合クワッソン性システムによる対立概念であり、二つの複合クワッソン性システムの相互作用により決断というクワッソンは深化する。それらは、いろいろな知識、経験や感覚からの情報により深化し、対称性が際立つ。この相互作用を支援するには第三のシステムが必要となるので、対立概念の発生には相当な意識レベルでの進化が必要とされると推定される。先住民においては、理想と現実の認識はなかったのではあるまいか。

第3章

神話素の二項対立の萌芽

ホモ・サピエンス・サピエンスと呼ばれる現生人類の直接の祖先は、7万年前から8万年前に中東に進出し、上部旧石器時代から中石器時代を経験したアフリカ系ホモ・サピエンスホモ・サピエンスである。オックスフォード大学のStephen Oppenheimer博士²⁷⁾は、アフリカのホモ・サピエンスから現生人類へは生物学的特徴として約200ccの脳サイズ縮小が伴っていたと指摘した。脳サイズの縮小と新石器時代のいろいろな特徴が現れるまでの約2万年という移行期が、旧石器時代から

の精神的飛躍の準備期間であったことは間違いない。

旧石器時代の人々は石器以外には文字、伝承その他生活の記録をほとんど残していないので、どのような思考をしていたかは不明である。一時期、現代のシュールレアリズムをも超える作品と称揚されたショーヴェー洞窟の絵画にしても、ロンドン大学のNicholas Humphrey 教授によれば、秩序だった思考を跡付けるものではなく言語獲得寸前までの泡沫的なものにすぎない²⁸⁾。精神の飛躍に先行したのは、脳サイズの縮小やまえがきでふれた中沢新一教授のβエンドルフィン仮説⁸⁾、*FOXP2* 遺伝子の突然変異による言語の獲得²⁹⁾、それに本稿の二項対立による表象の取りまとめ、などが考えられる。では、旧石器時代から新石器時代への移行の境界領域にある人々を現代の地球上に発見できるだろうか。

今年(2010年)、インドネシア政府は国勢調査を実施しているが、ジャングルの奥地に派遣された政府職員が、裸で暮らしている部族に遭遇したことが映像とともに伝えられた³⁰⁾。この人々と政府職員との間には、にこやかな挨拶とともにコミュニケーションが成立していた。本稿の視点からいえば、裸の生活は風習に過ぎず、彼らは21世紀文明の中にいることを自覚し、精神の飛躍はとうに済ませたと見受けられた。

カニバリズムとクロイツフェルト＝ヤコブ病の関係で有名になったパプアニューギニア北岸マダンから南へ約100キロの山中に住むフォア族³¹⁾は、カニバリズムから脱却するようにというオーストラリア政府の指導で、コーヒーの栽培を始めている。彼らは極めて

短期間に先進国からの経済的、政治的強圧を受けて現代人のなかま入りをした。生活の変貌の上では特殊なケースと思われるが、そのような外圧を受け入れる精神的準備はすでに整っていたと見るべきである。

これらに対し、1960年代に絶滅したヤーガン族と呼ばれるティエラ・デル・フェゴ島人の生活³²⁻³⁴⁾は、上部旧石器時代の残滓を濃厚に帯びていた可能性がある。本稿に関連する事項を拾い出して見る。

- ① 南極に最も近い酷寒地域にもかかわらず、彼らは裸で、家も作らず、貝を採集して生で食べていた。岩陰に身を寄せ寒い風をよけながら、おしゃべりをして一日を過ごしていた。島の発見と命名の由来は随所で火が焚かれていたことによるそうだが、日々の生活では、ほとんど使わなかったらしい。同属意識はもっていたようだが、リーダーはいなかった。
- ② イギリス人宣教師たちが彼らの窮状を救おうという目的で上陸した時、彼らは宣教師たち7人を虐殺し、遺体は放置した。
- ③ Darwinによれば、ビーグル号のような大きな船には何の興味も抱かず、ビーグル号からおろされたカッターに、なみなみならぬ関心を寄せた。
- ④ Darwinの航海の際に、二度目のフェゴ島訪問を果たしたFitzRoy艦長は、ロンドンで教育したJemmyというフェゴ島人を故郷に帰した。この時、Jemmyは着ていた洋服を脱ぎ捨て、元の裸にもどった。また、同郷の人々も初の“海外留学”を果たした彼に敬意を表さなかったし、本来ならば、ある種の指導力を身につけたはずのJemmyをただのなかまとして迎えた。

フェゴ島人の窮状を救い、文明人に仕立て上げようというイギリス人たちの19世紀中葉数十年にわたる努力は、当初はほとんど報われなかった。逆に、フェゴ島人は、文明世界から持ち込まれた感染症（天然痘と麻疹）により、全滅の憂き目を見ることとなった。FitzRoy艦長が、フェゴ島人たちをロンドンに連れて行ったとき、真っ先に海軍病院で種痘を受けさせたというのは特筆に値する。

彼らの出自は、毛皮を着てベーリング陸橋を經由しアメリカ大陸を南下した古先住民であろうが、フェゴ島の人々の生活水準は極端に低かった。材料が手近になかったということもあるかも知れない。氷河時代が終わって海水面が上昇し、居場所が島となって本土から隔離された後、生活技術が退化した可能性もある。宣教師たちの善意を理解し得ずにおこした虐殺事件は、単純に“よそ者は殺せ”という直感的思考に頼っていたことを思わせる。同属／よそ者という二項対立は持っていたが、理性的、抽象的思考ができず、殺人に関しての罪の意識は持たなかった。遺体の放置から見て、宗教心は発生していなかった。

フェゴ島にも神話はあったという報告もある³⁵⁾が、ブラジル先住民の神話のような華々しさを展開していたかどうかは分からない。ヤーガンにも一神教があったとするウィーン大学Wilhelm Koppers教授の詳細な報告がある³⁶⁾が、1920年代の調査であり、キリスト教の影響が明らかに強いと感じられるので、本稿では論評しない。ただ、こどもの死亡率が極めて高いことを伺わせる報告である点は、考慮する必要があるであろう。

いずれにしてもヤーガンは、暑さ／寒さ、空腹／満腹などの感覚的な右脳機能としての

二項対立は持っていた。一方では、ビーグル号のカッターの素晴らしい形や機能には関心を示すといった、左脳機能らしきものも見られる。言語は獲得していたものの全体として見ると、彼らは旧石器時代の最終期から初期新石器時代への移行の境界領域にあったのではないだろうか。

古代ギリシャの発掘調査³⁷⁾によれば、ヨーロッパで初めて初期新石器時代を迎えたのはギリシャに展開した現生人類であり、特徴は住居と部落の構築、宗教および神概念の発生を窺わせる人形の製作などにある。

フェゴ島人が旧石器時代の残滓を濃厚に帯びていたとしても、その後、イギリス人宣教師たちの熱意により、19世紀中にはフォークランド島に彼らを集めての教育がある程度の実績を収めた。本稿の文脈では、彼らの左脳に初期新石器時代への準備が整いつつあったことを意味する。しかしブラジル先住民と比べると、彼らは神話素の二項対立により豊かな神話群を創出する機会を失い、それとともに世界や人生の意義を理解することもなく、まして自然に密着しての生活の意義を知ることもなく、ついに絶滅を迎えた。ただ彼らは、現生人類が新石器時代に入る前には、右脳優先の生活を送っていたという重要なメッセージをわれわれに残してくれたのである。

あとがき

現生人類の精神の進化には非連続性が認められ、右脳と左脳では機能の発展に時間差があり本稿では右脳が先行したと示唆した。

Doniger教授は雌雄、左右、善悪、左脳と右脳など生得的に二値論理を持つわれわれの思考は、究極的にはyes/noの二項対立に終わるとした¹⁾。しかしyes/noは存在の問題に触れ、思考の原点ともなる。それは人間文化の根底にある二項対立としてシステムの問題に帰着し、究極的には複合クワッソン性システムの生/死の問題に収斂するであろう。Doniger教授は、片足で立ちながら、“Lévi-Strauss教授とは誰？”と聞くような人がいたら(そのような人がいるとも思えないので、これは冗談である)、この本を声高に読むように、と冒頭にあげた書籍¹⁾を推薦した。Lévi-Strauss教授を学ぶなら人間における二項対立をしっかりと意識しなければならない。晩年にさしかかっていたLévi-Strauss教授が生涯の研究をまとめた小著¹⁾は、実はシリーズな問題を扱っていたのである。

謝 辞

本稿公表の機会を与えられた本学三浦亮一理事長、赤塚尹巳学長および関係各位に厚く御礼申し上げます。

文献

- 1) W. Doniger : C. Lévi-Strauss, "Myth and Meaning", vii-xv, 1979, Schocken Books, New York, 1979.
- 2) ダニエル・チャンドラー著、田沼正也訳：『初心者のための記号論』、オンライン版、(原書は、Daniel Chandler : "Semiotics for Biginners", <http://www.wind.sanet.ne.jp/masa-t/tougobunseki/html>)
- 3) 渡辺公三著：『Lévi-Strauss 構造』、思想の冒険者たち第20巻、講談社、東京、1996年、pp.322-323.
- 4) レヴィ=ストロース著、川田順三・渡辺公三訳：『レヴィ=ストロース講義——現代世界と人類学』、平凡社ライブラリ、平凡社、東京、2005年。(原書は、Claude Lévi-Strauss : "L' anthropologie face aux problèmes du monde moderne", The Ishizaka Foundation, 1988, Tokyo)
- 5) 矢後長純・立浪忍・福田信男：「再考2コンパートメント準平衡理論——クワッソン性システムによる生命の起原、進化、崩壊および消滅」、聖マリアンナ医科大学雑誌、Vol.25,pp.533-552, 1997.
- 6) 矢後長純・福田信男：「クワッソン性システムによる寿命理論の展開——生体高分子の寿命から人類生命表及び意識の構造に至る2コンパートメント準平衡理論——」、『ライフ・スパン』、Vol.14, pp.1-74, 1999.
- 7) クロード・レヴィ=ストロース著、大橋保夫訳：『野生の思考』、みすず書房、東京、1976年。(原書は、Claude Lévi-Strauss : "La Pensée Sauvage", Librairie Plon, Paris, 1962)
- 8) 中沢新一：『芸術人類学』、pp.162-189、みすず書房、東京、2006年。
- 9) 福嶋亮大：『神話が考える——ネットワーク社会の文化論』、p.318、青土社、東京、2010年。
- 10) エドワード・O・ウィルソン著、山下篤子訳：『知の挑戦——科学的知性と文化的知性の統合』、p.189、角川書店、東京、2002年。(原書は、Edward O. Wilson : "Consilience", 1998)
- 11) Lévi-Strauss著、早水洋太郎訳：『神話論理 I。生のものと火を通したもの』、みすず書房、東京、2006年。(原書は、C. Lévi-Strauss : "Mythologiques : Le cru et le cuit", Plon, Paris, 1964. English Translation by John and Doreen Weightman, "Mythologiques Volume 1. The raw and the cooked", Univ. Chicago Press, 1969)
- 12) 寺尾格：『『城』あるいは山辺のカフカ』、遊塵、第2号、pp.29-35、秦野歌談会、秦野、2010年。
- 13) ヘロドトス著、松平千秋訳：『歴史』、巻1、中央公論社、東京、1970。
- 14) 矢後長純：「クレタ島ヴァシペトロ遺跡を訪ねて——ゼウスはミノア文明の終焉をどう見たか?」、愛国学園大学人間文化研究紀要、第9号、pp.71-84、2007年。
- 15) スティーヴン・ミズン著、松浦俊輔・牧野美沙緒訳：『心の先史時代』、青土社、東京、1998年。(原書は、Steven Mithen : "The Prehistory of the mind", Thames and Hudson Ltd. London, 1996)
- 16) 中沢新一著：『人類最古の哲学——カイエ・ソバージュ I』、講談社選書メチエ231、講談社、東京、2002年。
- 17) Fukuda, N. and N. Yago : "Population dynamics of mitochondria. I. A model for the role of ACTH in the degradation of adrenocortical mitochondria. J. Theor. Biol., 46, 21-30, 1974.
- 18) Fukuda, N. and N. Yago : "Population dynamics of mitochondria. II. Turnover and ageing of rat liver mitochondria. J. Theor. Biol., 58, 131-142, 1976.
- 19) Rodriguez, E., N. George, J-P. Lachaux, J. Martinerie, B. Renault & F.J. Varela : "Perception's shadow : long-distance synchronization of human brain activity.", Nature,397, pp.430-433, 1999
- 20) E.N.ローレンツ著、杉山勝・杉山智子訳：『ローレンツ カオスのエッセンス』、共立出版、東京、1997。(原書は、Edward N. Lorenz : "The Essence of Chaos", University of Washington Press, 1993.)
- 21) 矢後長純：「高い塀のうえから飛び降りようとしている猫は何を考えているか」、アイソトープ・ニュース、2001年10月号、p. 26、日本アイソトープ協会、東京。
- 22) 矢後長純・福田信男「芸術作品に見られる緊張と静謐の持続について——東洋思想のシステム進化論的考察序説」、愛国学園大学人間文化研究紀要、第4号、pp.41-65, 2002年。
- 23) 矢後長純・斎藤彰香・大井一徹：「クレタ島バシペトロ遺跡」、エーゲ海学会誌、第23号、pp. 1-16, 2009.
- 24) 三中信宏：「分類思考の世界——なぜヒトは万物を「種」に分けるのか」、講談社現代新書、講談社、東京、2009年。

- 25) ミッシェル・セール著、及川馨訳：『生成——概念をこえる試み』、法政大学出版局、東京、1983年。（原書は、Michel Serres：“Genèse”, Editions Grqsset et Fasquell, Paris, 1982）
- 26) 山口祐弘：「対立」、有福孝岳・坂部恵編『カント事典』、pp.323-324、弘文堂、東京、1997年。
- 27) スティーヴン・オッペンハイマー著、中村明子訳：『人類の足跡10万年全史』、草思社、東京、2007年。（原書は、“Stephen Oppenheimer：“Out of Eden: The peopling of the World”, Constable & Robinson Ltd., London, 2003）
- 28) ニコラス・ハンフリー著、垂水雄二訳：『喪失と獲得——進化心理学から見た心と体』、pp.122-159、紀伊国屋書店、東京、2004年。（原書は、Nicholas Humphrey “The mind made flesh --- Essays from the frontiers of psychology and evolution”, Oxford University Press, 2002）
- 29) Enard, W., Przeworski, M., Fisher, S.E., Lai, C.S.L., Wiebe, V., Kitano, T., Monaco, A.P., and Paabo, S., : “Molecular evolution of FOXP2, A gene involved in speech and language”, Nature, 418, pp. 869-872, 2002.
- 30) NHKニュース、2010年7月31日。
- 31) リチャード・ローズ著、桃井健司・網屋慎哉訳：『死の病原体プリオン』、草思社、東京、1998年。（原書は、Richard Rhodes：“Deadly Feasts”, Simon & Scuster, Inc., New York, 1997）
- 32) リチャード・マークス著、竹内和世訳：『ビーグル号の3人——艦長とダーウィンと地の果ての少年』、白楊社、東京、1992年。（原書は、Richard Lee Marks：“Three Men of the Beagle”, 1991）
- 33) Nick Hazlewood：“The life and times of Jemmy Button”, Hodder & Stoughton, London, 2000。（書評：三中信宏、2001。http://cse.niaes.afrc.go.jp/minaka/files/savage.html
- 34) チャールズ・ダーウィン著、島地威雄訳：『ビーグル号航海記』、岩波文庫、1959年、東京。（原書は、Charles Darwin：“The voyage of the Beagle”, Wordsworth Edition Limited, Hertfordshire.）
- 35) http://inuiyouko.web.fc2.com/Folklore/w07.html
- 36) ウィルヘルム・コッパーズ著、白鳥芳郎訳：『未開人の世界観——文化人類学的考察——』、三和書房、京都、1957年。（原書は、Wilhelm Koppers：“Primitive man and his world picture”, London, 1952.
- 37) Catherine Perlès：“The early Neolithic in Greece——The first farming communities in Europe” Cambridge University Press, 2001.

小論投稿後の2010年10月11日、歌人今野寿美氏（角川短歌賞、現代短歌女流賞、葛原妙子賞などを受賞。現在、NHK短歌選者、歌誌『りとむ』編集人）が「歌は塔のごとく組みあげるべし」と頼阿（1289～1372）の『青蛙抄』のこたばを表題にして、短歌の構造と作法に関する歌論を発表された（平成22年度千葉県歌人クラブ成田大会特別講演）。論点のうち小論にとって重要な部分は、「短歌の制作にあたっては後部七七を基盤として先に構築し、前半部はあとから塔の建築のようにつけるべきである。すでに14世紀に頼阿が指摘していたこととはいえ、現代短歌でも基本作法と考えなければならぬ。」というものであった。

小論との関係で見ると、ジャガーから火を奪ったというGé神話では、結論（=基盤）は南北アメリカ先住民に共通だが、そこに至るまでの導入部には部族ごとに偏差がある。このような思考法は新石器時代に成立していたといえそうである。